

極低出生体重児の乳児期の フォローアップと早期介入システム

— 母親の不安軽減の効果について —

(分担研究：ハイリスク児の発達支援（早期介入）システムに関する研究)

研究協力者：川上義

共同研究者：斉藤和恵、橋本加奈枝、横山恵子、秋山美奈子、大友美奈子、孝内由香

要約：NICU退院後の極低出生体重児を対象に、月に一度、新生児科医師、未熟児室看護婦、臨床心理士による乳児健診（フォローアップと早期介入）を1歳まで行なった。この乳児健診に参加した19例について、母親の不安を「STAI」の状態不安スコアによりNICU退院時、1ヵ月後、6ヵ月後、1歳時に評価した。対照群は極低出生体重児をもつ母親でこの健診システムに参加しなかった13例とし、同時期に同様の検査を行なった。健診参加群では退院時には不安スコアは非参加群より高かったが、次第に不安は軽減し、6ヵ月時点では非参加群より不安スコアは低くなり逆転した。一方、対照とした非参加群では、NICU退院後より不安スコアに変化がみられなかった。この結果より、現在行なっている健診システムが極低出生体重児をもつ母親の不安軽減に役立っていることが判明した。

見出し語：極低出生体重児、早期介入、育児不安、育児支援

目的

極低出生体重児は脳性麻痺や精神遅滞など明らかな神経学的な障害を認めなくても、乳幼児期に身体発育だけでなく運動・言語面での発達の遅滞を示す児が少なくない。極低出生体重児の育児や発育・発達の遅れに強い不安を抱く両親が少なくなく、このため親子関係に問題を生じ、児の発達に悪影響を及ぼす危険性がある。

2歳時からの極低出生体重児に対する「早期介入」は既に1993年より当院でも行なっているが、育児不安のより強いNICU退院後から1歳までの乳児期に当院で行なっているフォローアップと「早期介入」システム（発達援助健診と称している）の効果、特に発達援助健診が母親の不安軽減に及ぼす効果について報告する。

対象

極低出生体重児を対象に、退院後毎月1回、発達援助健診を受診した19例を参加群、自宅が遠方であったり、家庭の事情等により発達援助健診に参加

しなかった13例を非参加群とした。この非参加群は近所の保健所や病院で、頻度は様々であるが一般の乳児健診を受けている例である。

方法

母親の不安の検査は「STAI」の状態不安項目を用い、経時的変化をみた。スコアが高い程不安が強いことを現している。

検査時期はNICU退院時、1ヵ月後、6ヵ月後、1歳時とした。

発達援助健診の内容

スタッフは新生児科医師、未熟児室看護婦、臨床心理士である。週1回火曜日の午後に、医師が小児科外来で発達・発育を含めた内科的な診察を行ない、極低出生体重児の発達の特徴を踏まえ、育児指導を行なっている。この発達援助健診の特徴は、外来での医師の診察の前または後に別室で臨床心理士と未熟児室看護婦による両親へのサポートを行なっている点である。臨床心理士は発達のチェックと自宅で

の遊びを中心とした発達指導を行なうが、発達の遅れを強調することなく、両親の育児不安を取り除き、勇気づけることを目標としている。NICU入院中から顔見知りの未熟児室看護婦は両親と退院後の児の状態や育児についての話し合いを行ない、哺乳や離乳食の指導などを行なっている。また、この別室で発達検査を待つ時間に同じ極低出生体重児を持つ親どうしが話合える時間がとれるようにしている。

結果

参加群と非参加群の母親の不安を「STAI」の状態不安スコアを用いて経時的に検査した結果を以下に示す。

	参加群	非参加群
退院時	41.3±10.7	38.1±6.1
1ヵ月後	39.3±11.1	38.0±10.6
6ヵ月後	34.8±7.9	38.3±6.0
1歳時	34.0±6.5	

NICU退院時には非参加群の方が参加群に比較し不安度のスコアは低かった。非参加群では退院後も母親の不安度は変化していないが、参加群では次第に不安が減少し（統計学的な有意差あり）、退院時には非参加群より高かった不安度のスコアが6ヵ月で逆転していた。

結語

「STAI」を用いた母親の不安検査で発達援助健診が極低出生体重児をもつ母親の不安軽減に効果があったことが判明した。

今後の問題点としては、未熟児室の看護婦が健診に参加し、退院後の両親の不安や育児上の相談相手になったり、哺乳や離乳指導などを行なっても現在の健康保険制度のもとでは経済的な裏付けがないことや、遠方からの通院の親子への負担なども考慮しなければならない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: NICU 退院後の極低出生体重児を対象に、月に一度、新生児科医師、未熟児室看護婦、臨床心理士による乳児健診(フォローアップと早期介入)を1歳まで行なった。この乳児健診に参加した19例につき、て母親の不安を「STAI」の状態不安スコアによりNICU退院時、1ヵ月後、6ヵ月後、1歳時に評価した。対照群は極低出生体重児をもつ母親でこの健診システムに参加しなかった13例とし、同時期に同様の検査を行なった。健診参加群では退院時には不安スコアは非参加群より高かったが、次第に不安は軽減し、6ヵ月時点では非参加群より不安スコアは低くなり逆転した。一方、対照とした非参加群では、NICU退院後より不安スコアに変化がみられなかった。この結果より、現在行なっている健診システムが極低出生体重児をもつ母親の不安軽減に役立っていることが判明した。